読売新聞　2021.12.31　読売新聞　（第3種郵便物認可）

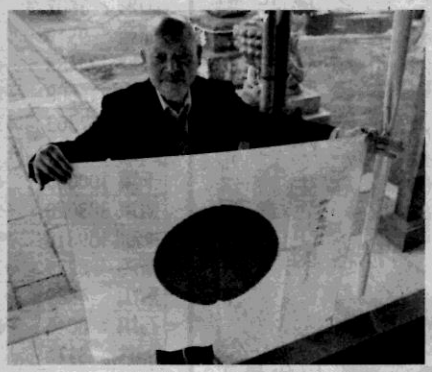
日章旗 76年経て流山に

名前手がかり 探し出す

米国団体 赤城神社に返還

太平洋戦争中、サイパンから元米兵が持ち帰った日章旗が、米国オレゴン州の非営利団体「OBONソサエティ」によって流山市の赤城神社の筆頭総代、山崎政治さん(84)の元に届けられた。日章旗を始めとする戦没者の遺留品を日本の遺族へ返還する活動に取り組む同団体が、全国に約300ある赤城神社の中から、流山の同神社を探し出し、届けた。

（鈴木伸彦）



本殿に向かって、日章旗が帰ってきたことを報告する山崎筆頭総代（流山市の赤城神社で）

この日章旗は、縦約75センチ、横約85センチの大きさ。多くの日章旗は、本人の名前や激励する人たちの名前などが書かれているが、この旗にはない。旗には「郷社赤城神社　社掌佐久間亀蔵」とだけ書かれていた。

旗は、米フロリダ在住のノーマ・グレゴリーさんが、その兄の友人である元米兵から譲り受けたという。同団体は6月、グレゴリーさんから「遺族の元へ返してほしい」と依頼され、日本人スタッフの工藤公督（こうすけ）さんがインターネットや資料で調査。旗に書かれていた佐久間亀蔵氏が、流山町（当時）の町長（1916年～22年）を務め、赤城神社の祭司をつかさどる社掌をしていたことを調べ上げ、返還につながった。

旗は今月19日に届き、赤城神社で保管する予定。筆頭総代の山崎さんは「地元の若者が戦地に行く際に佐久間氏が武運を祈って、したためたのでしょう。戦争は悲惨なものですが、終戦から76年たって遺族に返したいと思う米国人の温かさを大事にしたい」と話した。

2009年に活動を開始したOBONソサエティは、これまでに、400以上の日章旗などを遺族や地域社会へ返還してきた。同団体の工藤さんは「この旗には本人の名前がなかったので、帰れる場所がないのかと心配していましたが、これで旗を持って出征した人も、持ってきた元米兵も喜んでいるはずです」と語った。